

青春の魂傷

十六歳の日記
伊豆の踊子



教育出版センター

昭和五十一年八月十五日 初版発行

川端康成研究叢書 1

傷魂の青春 「十六歳の日記」「伊豆の踊子」

編 著

川端文学研究会 川端康成研究叢書編集委員会 ©

発行者

柴 崎 芳 夫

印刷者

長 塚 印 刷

発行人 (株)教育出版センター

東京都豊島区北大塚三一二九一二
電話 (〇三) 九一七―八九三〇代
振替 東京〇―一四六一二

乱丁・落丁本はお取替えいたします。 3391―2001―1475

序 文

川端文学研究会が、實質的に何時ごろ発足したかははっきり記憶していない。がとにかく同志が相集つて、相当ボリュームのある「川端康成の人間と芸術」を刊行するまでに至ったことは事実であり、その中心には長谷川泉氏がいた。やがて研究会が正規に発会式をもち、その席上右の著書を、臨席された川端氏に親しく贈呈した。また氏が東大在学中師事し、その講義を聴いた、故久松潜一博士が、その折、研究会長に推され、快諾された状況は今も私の眼前に在る。

研究会は長谷川君その他の努力で、定期的に例会をもつて今日に至ったが、このたび「川端康成研究叢書」として、最初期より最末期までの代表作品を対象に、中堅新進の研究者による総合的研究叢書を刊行する予定を立てた。第一巻「十六歳の日記」「伊豆の踊子」にはじまって、第十巻「片腕」「たんぽぽ」に終る。各巻末に連続して精細な「作品研究史」及び「川端康成伝」を附することになっている。

従来川端氏の諸作品に対する片々たる時評類は多く、また人物に対する簡単な解説類は少しとしないが、全作品を一貫して丁寧に分折し、また実証的にその全生涯を浮き彫りにした、重厚で立体的な著作は欠いている。この叢書が完成されれば、そうしたうらみを霽らすに十分であり、難解な川端文学の全貌が解明されるであろう。

私は個人としての川端さんとはさして親しい交わりをもたなかったが、あるいはユネスコ国内委員会の主査と調査委員との関係その他で、時々談話を交換し、仕事を共にしたことがあった。とりわけ最晩年に近い氏のハワイ滞在中、たまたまハワイ大学の客員教授としてその地にあった私は、しばしば氏を主賓とする宴席に陪席し、氏の宿泊されたホテルにもお邪魔して、共に椰子の葉蔭に隠顕する海上の月を賞したこともあった。私はその時短期間ながら、氏のひとがらに肌でふれた思いがし、文筆の士としてのみでなく、あらゆる階層を通じて、第一流の人であるとの感銘をうけた。それはノオベル文学賞の授賞者であると否とにかゝわらないのである。

とまれ、川端氏をもつことは、近代日本の栄光である。川端文学の深い究明は、後来の日本人に課せられた至上の課題の一つと云うべきであろう。

昭和五十一年六月

目次

序 吉田精一

十六歳の日記

「十六歳の日記」制作私考……………松坂俊夫

制作時期への疑問／制作時期をめぐる諸論／「あとがき」の問題

／「骨拾ひ」との関連／作者の意図／川端文学の方法

「十六歳の日記」と祖父―川端精神史における祖父の位置……磯貝英夫

「孤児」生活の実質／祖父の性格／少年の祖父受容／川端精神史

における少年期

「十六歳の日記」と「故園」その他―「十六歳の日記」へあ

とがきゝの運命……………登尾

豊

50

はじめに／「あとがき」の重要性／「あとがき」―作品発想の

核／「あとがき」の後退／孤児意識の変化／「父の名」・まとめ

伊豆の踊子

「伊豆の踊子」の創作動機……………長谷川 泉 77

孤児根性の歪み／愛の薫染／心霊学的な感應、予知

「伊豆の踊子」論——一つの文体論的考察……………小林 一郎 101

現実と非現実／模型の自然と行動／踊子の汚れと四十女の眼／

変身と霊界／観念の世界と「抒情」／「抒情」否定と「おふく

ろ」の眼

「伊豆の踊子」の構造——回想物語の中の実在人物……………藤森重紀 123

作品掲載までの経緯／自己救済への道／実験の可能性

川端文学における「伊豆の踊子」の位置……………武田勝彦 157

序説／巨視的アプローチ／微視的アプローチ／結論

「伊豆の踊子」の文学史的意義……………高田瑞穂 176

文学史的意義とは／川端文学の二底流／「伊豆の踊子」の今日的

意義

文学教材としての「伊豆の踊子」	森本 穫	189
-----------------	------	-----

文学教材としての位置／教科書における収録状況／教材としての意義と問題点

作品研究史〔二〕

「十六歳（十四歳）の日記」「伊豆の踊子」作品研究の展望と問題点	林 武志	215
---------------------------------	------	-----

川端康成伝〔一〕	羽鳥徹哉	251
----------	------	-----

川端文学とその背景

はじめに／母性思慕／郷土の自然、古里の御詠歌／祖父三八郎没落の歴史／父母の履歴／康成誕生、父母の死／宿久庄へ、秋岡家と姉芳子／豊川小学校、笹川良一／祖父の死、ひとり／孤児根性、作家川端の基底

十六歳の日記

「十六歳の日記」制作私考

松坂俊夫

一 制作時期への疑問

「十六歳の日記」が発表されたのは、大正十四年九月号の「文藝春秋」誌上であり、以来四十余年間、その制作時期に関して疑問を抱いた読者、もしくは批評家は誰もいなかった。作者の記している通り、それは、数えて十六歳、満十四歳の少年の日の記録を、原文のまま、括弧の中に説明を書き加わえたのみで発表されたものと信じられてきた。

この制作時期に関して疑問を呈し、いくつかの具体例を指摘しながら論証し、発表時に作者の手が加わっていると推定して、「氏はこの作品を十六歳の少年の日記として読みとらせるべく巧みに演出し、見事に成功したのである。」と記したのは川嶋至氏であり、昭和四十四年の刊行になる『川端康成の世界』（講談社）の中においてであった。

その後、川嶋氏の論考への反論、釈明として記された作者のエッセイに、昭和四十五年三月号の「新潮」に発表された「蕉の舞う西空」があり、それは川嶋氏の論評の「臆測、誤判」であること

を述べた内容になっている。川嶋氏はこの作者の否定意見に対して、「私は作者のことばをすべて納得したわけではないし、反論の材料もないわけではないが、いまはまだその時期ではないと考えている。ここではただ、作者のことばだからすべてが真実だというような安易な認識は、少なくとも文学の世界では通用しないはずだということを述べておけばよいであろう。」（川端康成の『紫式部日記』昭46・12「春秋」、後『美神の反逆』収録）と記している。

たしかに、川嶋氏の述べているように「作者のことばだからすべてが真実だというような安易な認識」は通用しない。とくに川端文学においてはなおさらのことといえよう。作者は、「雪国」についてではあるが、「読者に事実と受け取られるところが案外作者の空想であったり、空想と受け取られるところが案外事実であったりするかもしれないと、作者の私は考える時もある。」（『独影自命』六の一）とも記している。もとよりこのことばも、そのまま真実と受け取るべきではないかもしれないが、「十六歳の日記」もまた、「事実と受け取られるところが案外作者の空想」ではないのか。作者は、川嶋氏の説くように、空想を読者に事実として受け取らせるべく、演出しているのではないだろうか。「空想」は、想像、あるいは創造ということばに置換える方がより適切かもしれないが。

「鳶の舞う西空」に対する川嶋氏の反論の発表されていない現在、私は私なりに、「十六歳の日記」の制作時期についての考えを記してみたい。もとよりそれは、川嶋氏の論考や、磯貝英夫氏の「十六歳の日記」（『川端康成の人間と芸術』昭46・4教育出版センター収録）に導かれてのことであるが。

ところで、磯貝氏の論考の要点は、「十六歳の日記」は、「加筆訂正のあるなしにかかわらず」「す

でに明示されている補筆部分と『あとがき』の部分とを作品の必須の構成要素としてとりわけ重視し、「日記は、それらの支柱を得て、ようやく、独立し、完成した作品となりえたので、そのないう日記は、いかに生彩があっても、ついに断片にすぎない。日記の意味の発見とその完成との両面を加えて言って、これは、あきらかに、大正一四年の作品である。」というもので、きわめて妥当な意見というべきであらう。

しかし、作者も用い、磯貝氏も使用している「加筆訂正」ということばは、——作者が用いているので磯貝氏も使ったのであらうが、——厳密に言えば、川嶋氏の意見を要約したこととは言いえないと思う。もっとも川嶋氏も、「後年十分に加筆訂正する余地は残されていたのではないだろうか。」というように用いており、「川端康成と『紫式部日記』」(前出)の中でも、「加筆訂正」と記しているが、『川端康成の世界』では、『十六歳の日記』を、加筆訂正程度のものとは考えていないのである。たとえば、「どうも私には、『十六歳の日記』が、実は二十七歳の日記のように思われてならない。原文の日記が存在したのは事実であらう。しかし、原文はあくまで骨子であって、それが二十七歳の職業作家によって肉付けされ潤色され、はじめて『十六歳の日記』という作品が生まれたと思うのである。」という部分、そして、「仮に十六歳の少年が写したものが、ちょうど肉身の姿を写真に残し、声をテープに録音しておくような、会話の筆記とわずかな情況の説明だけだったとしたならば、『十六歳の日記』という小説の見方も大幅に違ってくるのではないだろうか。」というところに川嶋氏の考えは顕著である。

これは川嶋論考を少し注意して読めば容易に気付くことであり、当然作者が見抜けなかったはずはない。作者が、川嶋氏の所見を「加筆訂正」、もしくは『創作』がまじっている」という程度のものに意識してすりかえたとしたら、「薦の舞う西空」も、事実を記したエッセイのようでないながら、多分に創作的な内容であるということになろう。そして大正十四年の発表時における「十六歳の日記」の大部分（日記・括弧の中の説明・あとがき）を小説と見るか、それとも「加筆訂正」程度と考えるか、すくなくとも「日記」の部分は作者の記しているように「原文そのまま」と受け取るかは、「十六歳の日記」の評価のみならず、川端文学そのものをどう理解するかという上でも、安易には見過ごせない問題であろう。

二 制作時期をめぐる諸論

ここで、すでに磯貝氏によって要約されていることではあるが、「十六歳の日記」前出に若干筆者の考えも補いつつ、川嶋氏の論証と、作者の釈明・反論、さらに、磯貝氏の所説をも整理しておきたい。

川嶋氏は、(1)『選集』の「あとがき」では、「机代りの背継」の上で日記を書いたと記しているが、作品の中では「テェブル」を使っていること。(2)「あとがき」に、この当時の生活を記憶していないとあるのにもかかわらず、作品の中の説明の部分に、原文のモチーフについて記されてい

ること。(3)主人公の川端少年が「豊正、ほんぼん」、手伝いの老女の本名「田中みと」が、「おみよ」と記されていること。(4)「あとがき」に、日記を発見したのは書いてから十年後とあるが、実際に発表されたのは十一年後であるから、すくなくとも一年は日記を作品の素材としてあためていたと考えられること。(5)この日記の前後に書かれた文章は、文語調のおそろしく類型的なものであり、日記の文章と質がちがうこと。——等をその理由としている。

この川嶋氏の所説に対して、作者は、『十六歳の日記』の原の稿を発表のため写しとったとき、破棄か焼却してしまったので「二十六歳で発表の時の『加筆訂正』があらうと臆測、誤判されても、それを否む確かな証拠物件を失ったことになる。」ということと共、(1)テェブルと背継は両方使っていたこと。(2)日記を「書いたことさへ忘れてゐた」といっても、物にふれば思い出すのは人の常であること。(3)証拠はないが、日記が「素材としてあためられてゐた」ことは一向になかったことを記して、反論・釈明したのであった。

磯貝氏は、「作者の言うとおり証拠物件はなにもないのだが、作者自身が誤判と明確に言う以上、それを信じるのが礼節であらう。」としつつも、(1)『あとがき』には、『記憶してゐない』と現在形で書かれていて、それは思い出せない状況として受け取れるのに、「忘れていたということばだけを取りあげて、思い出すのを当然とした論法。(2)作者が「十年後」の発見ということは虚構であって、その点は「川嶋氏の明察の通り」だと最後に明かしている部分の、二つの点が気かりであることを記している。(1)の場合、『記憶してゐない』とは、単に『忘れてゐた』の同義語にすぎな

かったのかと、あの重い『あとがき』がかなり軽くなったような印象を持つことになる」し、(2)の場合は、家屋敷の売手や、カバンの中に入っていた日記の量だけでなく発見の年代も虚構であったということになると、どこまでが本当かわからないような不安におちいってしまうのである。そして、「そこから逆に、川嶋氏の推論が案外正しいかもしれないと思いはじめかねない。」という考えである。

「鳶の舞う西空」が発表された後、川嶋氏の「十六歳の日記」の制作時期への疑問との関連において、この作品について記されたのは磯貝氏の論考のみであり、作者が故人となった現在、再びその意見を聞く機会もなくなったわけだが、作者の考えはともかく、残された諸作から、その制作時期を考察し直すことは可能であろう。

三 「あとがき」の問題

「十六歳の日記」に、いわば「あとがき」は、五つあるといい。①大正十四年、この作品が「十七歳の日記」「続十七歳の日記」と題されて、「文藝春秋」に発表されたとき傍線を付して続けられた部分で、後に「あとがき」と称せられるもの。②昭和十三年に新潮社から刊行された『川端康成選集』第六巻のあとがきで、「十六歳の日記」について記された部分。③昭和二十三年、新潮社から刊行された『川端康成全集』第二巻の、「十六歳の日記」の解説にあたる部分で、後に、「あ